HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	II-2 1998年度日本学術振興会短期招へい プログラム研究成果報告概要
Author(s)	小池, 孝良
Citation	北方森林保全技術, 17, 70-70
Issue Date	1999
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67639
Type	article
File Information	hopposhinrin17-P70.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅱ－２　1998年度日本学術振興会短期招へい
プログラム研究成果報告概要

演習林研究部　小　池　孝　良

上記研究員２名が、日本学術振興会の事業の一環として、北大演習林に協力依頼があり演習林のへ訪問、講演と研修を実施した。概要を以下に紹介する。

1. エリック・Ｔ・ニールセン（アメリカ合衆国科学財団進化生物学および生態学部門査定官：ＮＳＦ[National Science Foundation of America]）*
　＊現所属：バージニア理工科大学生物学科教授

1）研究目的
森林の更新に関わる環境生理学的研究と日米の比較研究；特に常緑性植物の役割について

2）調査場所
ａ.北海道内：北大苫小牧地方演習林、札幌事務所、苫前営林署、上川営林署（1998年当時）管内、森林総研北海道支所
ｂ.本州：森林総研本所、筑波大学生物科学系、山梨県環境科学センター（八ヶ岳連峰）、京大生態学研究センター、京大芦生演習林、静岡大学理学部（富士山）

3）調査内容
ａ.シャクナゲ属の生育地調査とサンプル採取。
ｂ.共同研究の基礎事項（宿泊施設、測定機器の水準など）調査
ｄ.講演会：シャクナゲ属の林床における生存と光合成機能の生態生理研究

4）講評（北大演習林分）
北大演習林の全国における配置は、温度環境の点からも理想的である。特に、暖温帯から針葉樹林帯に配置された各演習林の広さと保存状態の優れた天然性林は、今後の森林生物学研究の拠点になると考える。苫小牧地方演習林の設備は、北アメリカの実験林の設備を凌駕し、生理生態研究の基礎となる実験設備も充実しつつあると考えられる。博士研究員の割合が少ない点は今後の課題である。世界に向けて博士研究員を公募することも検討事項である。（内容の大部分は丹保総長へ伝えた事項と同様である）

2. トーマス・Ｔ・レイ（バージニア理工科大学生物学科講師）*ならびに生物学専修修士課程学生８名（選抜試験による合格者）
　＊現勤務先：オーストラリア産業研究所植物生産学部綿花生産部門博士研究員

1）調査目的
日米の森林植生に関する比較生態学研究ならびに進化生物学研究

2）調査場所
ａ.北海道：北大苫小牧地方演習林、森林総研北海道支所
ｂ.本州：京大生態学研究センター、森林総研本所、小川学術参考林、筑波大学生物科学系、

3）調査内容
ａ.植生の類似性と相違性の比較研究および森林生物学研究の現状調査

4）講評（北大演習林分）
苫小牧地方演習林の設備は、樹冠生物学だけではなく流域における生物多様性研究水準は極めて高く、将来、共同研究を試みたい。北海道と北米東部における植生の類似性は将来、世界規模の環境モニタリングを行うステーションとして期待できる。